

「鬼島津と恐れられた男」



みなさん、お待たせしました！！今回は戦国時代です。日本史を学ぶ上で人気を二分するのはやはり「幕末」と「戦国時代」でしょう。そこで今回は戦国時代の武将について紹介します。

戦国武将の中でも特に有名な人物は、若い頃の徳川家康をケチンケチンにした風林火山、甲斐の虎「武田信玄」、敵に塩を送る義の男、越後の龍「上杉謙信」、油売りから一国の主へ美濃の蝮「斎藤道三」、神仏を焼き打ちにするバチあたり第六天魔王「織田信長」、一領具足、鬼の国土佐が生んだ四国の覇者「長宗我部元親」、三本の矢を息子に伝えた人心掌握の天才「毛利元就」、もう少し早く生まれていれば独眼竜「伊達政宗」、いつでも三途の川を渡る覚悟の六文銭、日の本一の兵（つわもの）「真田幸村」と数えればキリがないぐらい有名な人がいます。ちなみに先生は「大谷吉継」とか「石田三成」もけっこう好きです。なぜ、こんなに多くいるのかと言うと戦国時代は長いんです。室町時代の中でも 1467 年の応仁の乱以降を特に「戦国時代」と言うのですが、安土桃山時代も含めて、戦国武将が落ち着いたのは 1600 年の関ヶ原、1615 年の大阪夏の陣あたりです。だから、有名な武将も実は全然活躍した時代は違うのです。だからこんなにたくさんいるのです。そんな中、今回紹介するのは鬼島津（鬼石曼子）こと「島津義弘」です。

島津義弘は島津家中興の祖・薩摩を統一した島津貴久の4人の息子の二男で、16代目島津家当主である兄義久を助けて活躍した島津軍の最強部隊の武将です。兄の義久は国元で政治をし、戦は義弘が担当するという分業をしていました。この兄弟の結束は強く、義弘は常に兄を立てていたようです。三男、四男も強烈な武将ですが、それは割愛します。義弘のすごいところは生涯52回もの合戦で戦っているんです。合戦では大将でありながら先頭に立って戦った猛将であるだけでなく、戦術にも長け、いつも敵を恐怖に陥れていました。さすが戦闘民族、島津家筆頭の武将です。

島津と言えば伝説的な戦術が二つあります。「釣り野伏」と「捨てがまり」です。「捨てがまり」は少し後に紹介します。まず「釣り野伏」というのは、敵が自軍より圧倒的に多い場合の戦局をひっくり返す戦術で、まず、軍を3つに分け、両端の部隊を野に伏せさせます（隠れさせます）。そして真ん中の一隊が敵に突撃をします。そしてわざと負けて退却し、野伏している2隊の間に誘い込みます。当然敵はチャンスだと思い猛烈に追いかけてきます。それを3隊で袋のネズミとし、一気に叩くという戦術です。口で言うのは簡単なのですが、実はとても高等戦術で、逃げすぎてもいけないし、やられすぎてもいけないし、千人を超える部隊全員の息を合わすために血のにじむ練兵が必要なのです。しかもわざとやられるということは、多くの仲間の犠牲が必要になるのです。しかし効果は絶大で、結果的に本来負けてしまう戦を大勝利に導き、実は仲間の犠牲を最小限に抑えることができる戦術なのです。

さて、島津義弘の52回の合戦の中でも特に凄まじかったのは、朝鮮出兵の時です。朝鮮出兵は豊臣秀吉が全国の武将に呼びかけて明（中国の王朝）を倒すべく15万もの軍勢で朝鮮に渡った戦いです。1592年の文禄の役と1597年の慶長の役と二度に渡って遠征しました。なぜ出兵したかについては、最近の通説ではアジア侵略を進めていたスペインに対抗するためと言われています。

敵は朝鮮軍だけと思われがちですが、朝鮮は明の冊封体制下だったので明・朝鮮の連合軍と戦ったのです。実際、講和会議では日本と明で講和をしています。この戦いは日本が破竹の勢いで連戦連勝し、わずか21日で朝鮮の首都漢城を落としています。その後、明の本軍が参戦しますが日本軍の勢いは止まらず、朝鮮半島全土に日本軍は勢力を拡大していきました。その後、一旦講和を行い、文禄の役は終わるのですが、再度、慶長の役で朝鮮出兵が行われます。しかし、豊臣秀吉が死去したことにより、慶長の役も終わります。明の正史（明の正式な歴史書）『明史・朝鮮伝』には「明は10万の将兵を喪失し、100万の兵糧を浪費するも、明と朝鮮に勝算は無く、ただ関白が死去するに至り乱禍は終息した」と書いてあります。

なぜこんなに日本は強かったのか。それは100年以上戦国の世であったため、戦いなれた屈強な精鋭が50万人いたのです。武人集団全体で言うと200万人と言われていました。当時、世界最強と言われたスペインとイギリスの戦争でも両軍合わせても3万人あまり。イギリスの全騎士団の数が3万人程度と考えると、ずば抜けていることが分かります。だから朝鮮出兵は実は16世紀の世界で最大規模の戦争なのです。白兵戦では槍や日本刀をふるう武士は無敵でした。また、戦術を含めた組織力でも敵を圧倒しました。そして、長距離戦においても、実はポルトガルから伝わった鉄砲は日本で国産化され、さらに改良されて他国と比べて高性能になっていた上に、鉄砲の数は50万丁を越え、実は世界の銃保有国でした。だから当時日本は世界最強国家だったのではないかという人もいるくらいです。しかし、スペインやイギリスは海洋国家で軍艦のレベルが国内での陸上戦ばかりやっていた日本よりもはるかに優れていたことを考えると一概には言えないと思います。とにかくそんな強烈な猛者達が群雄割拠する日本武士の中で特に恐れられたのが島津義弘だったのです。

慶長二年に渡海した島津義弘は、唐島の戦いにおいて敵の水軍総大将・元均とぶつかり、鉄砲隊を前面に出して少ない兵で果敢に攻めつけ、敵を全滅させて制海権を奪います。さらに宇喜多秀家の指揮下に入って上陸し、南原城をわずか三日で落城させます。その時討ち取った敵は四百二十人であったといわれています。しかし、上述した通り、慶長の役は豊臣秀吉の死により、講和が成立します。そこで事件がおこります。講和が成立したにも関わらず、日本に帰る島津義弘などに朝鮮・明軍は攻撃を仕掛けてきます。いわゆる「泗川の戦い」です。

泗川新城に五千の軍勢で立て籠もった義弘に対し、明将、董一元・茅国器や朝鮮軍の合わせて五万の大軍に包囲されます。10倍の敵に囲まれて絶体絶命の義弘はどうしたか。普通は城にこもって助けが来るまで籠城戦をしますよね！だって10倍の敵なんですから。しかし、義弘は城門を開け、自ら敵中に突撃していきます。しかしさすがは義弘、当然無謀な突撃ではなく、伏兵を出動させて敵の隊列を寸断するという戦術を駆使した上での突撃です。その勢いは止まらず、敵は大混乱に陥り、全軍逃げ出します。島津の怖いところはここから。それを徹底的に追いかけてまわし、何と敵兵の首、三万八千七百十七を挙げたのに対し、島津軍の死者は2名だったという凄まじい戦果を挙げました。明軍は島津軍を「鬼石曼子(おにしまづ)」と呼んで恐れ慄いたそうです。ちなみに打ち取った敵の数や被害の数は島津の言い分なので、朝鮮や明の記録では数字がけっこう違いますし、前哨戦の泗川古城の戦いでは島津軍は150名の死者が出たそうです。しかし、間違いないことは大勝利であったことと、鬼島津と呼ばれて恐れられたということです。その後も朝鮮水軍の大将、李舜臣を討ち取ったりと戦果を挙げながら帰国します。

次に島津義弘の名が大々的に、そして伝説的に出てくるのは「関が原の戦い」です。西軍について義弘はあまりこの戦いに乗り気ではありませんでしたので、一切攻めずにかかってくる敵を討ち取るだけでした。そんな中、小早川秀秋の裏切りにより、西軍は総崩れを起こし、全軍撤退をします。しかし、ここで逃げては薩摩隼人の名折れ、されど島津軍はこの時わずか300人。しかも柱の一つである義弘が討ち取られれば、下手をすれば薩摩本国にいる島津家が危うくなる可能性もある。そこで島津義弘はまさかの行動に出ます。敵がうごめく東軍のど真ん中を徳川軍に向かって突撃します。この時の島津軍300はまさに鬼そのものであり、東軍にいたあの猛将福島正則ですらそれをよけて、道をあけてしまうほどでした。そして徳川軍の正面まで突撃したところで右へ転回、戦場を離脱します。そこで、徳川家康はここで島津を逃がしてはいけないと追撃を命じます。その追撃を任されたのが、かの有名な「赤鬼」こと「井伊直政」の赤備え部隊と、人生で一度もケガをしたことがないという、もはや化物「本多忠勝」。はっきり言って詰んでしまいました。しかしそこで島津家秘伝の戦術「捨てがまり」が発動します。捨てがまりとは100%死にます。敵前に残り、道を塞いで戦い、部隊が退却する時間稼ぎをするのです。それを買って出たのがマンガ「ドリフターズ」で有名になった「島津豊久」です。豊久は時間稼ぎどころか、せまる敵軍をなぎ倒し、大将である井伊直政に大けがを負わせ、後にこの傷が原因で井伊直政は死んでいます。そして島津義弘は無事薩摩にたどり着きます。これがいわゆる「島津の退き口」という伝説です。ちなみに「捨てがまり」は島津豊久だけでなく、多くの家来が何度も義弘の命を守るために買って出ました。島津義弘のすごいところはそういうところなのです。家来を大切に、一兵一兵に自ら酒をつぎに回る大将でした。だからこそ、全ての兵から島津義弘は愛されていたのです。「義弘様のためなら、この命など・・・」といった感覚が島津軍には浸透していたのです。そんな魅力的な武将が島津義弘なのです。みなさんも、捨てがまりとは言いませんが、友人や部下・後輩に愛される人になってほしいと思います。そのためにはまず、自分が周りの人を愛することです。自分を見がき、尊敬される人となり、そしておごることなく、周りの人を大切にできてこそ、初めて義弘のように周りに愛される人になると思います。